

2025年6月15日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教40「救い主はどこから」

詩編138：6～8、ヨハネ7：25～31

イエスさまは、わたしたちと真実に出会おうとされています。だからこそ、まことの神さまでありながらもまことの人となりました。けれどもそのことをわたしたちはなかなか受け入れることができません。そのようなわたしたちにイエスさまは言われます。「わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。わたしはその方を知っている。わたしその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである」（28～29節）

28節には、そのことを「大声で言われた」と記されています。宗教改革者のカルヴァンは、そこに怒りがあるとして次のように述べています。「キリストは彼らの無分別さにきびしい怒りをむけているのである。それというのも、横着にいつわりの意見にひたりこんだまま、真理への認識を放擲（ほうてつ）しているからである。彼はいわばこう言っているのだ。あなたたちはすべてのことを知っているが、なにも知ってはいないのである、と。事実、人々が自分のごくわずかな知識に陶然として、自分の考えに反対のものは、すべて大胆に退けてしまう時ほど、危険な災厄はないだろう」（『カルヴァン新約聖書注解ヨハネ福音書』）わたしたちは自分の見える範囲、自分の限られたわずかな知識の中でしか物事を理解できません。そして自分の考えにそぐわないものはすべて排除するのです。イエスさまはそのことを怒っておられます。けれどもその殻を打ち破るのが信仰です。

「わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである」（29節）ここが今日の御言葉のポイントとなりますが、そもそもイエスさまが誰であるのか、どこから来られたのか。これは極めて本質的な問いです。ここにわたしたちの信仰がかかっていると申し上げてよいでしょう。キリスト教の歴史を見ても、キリスト教の教理が形成されていく中では、常にイエスさまが一体誰なのかが論争の焦点となりました。それだけこの「殻」を打ち破るのが困難だということです。

少し専門的なことを申しますと、父なる神さまと子なるイエスさまが同質（ホモウーシオス）であるという信仰があります。アリウスとアタナシオスとの論争が有名ですが、やがてニカイア信条が制定されて、父・子・聖霊が同質であるといういわゆる「三位一体」の教理が確立していきました。ちなみに今日の日曜日はペンテコステの次の日曜日で、教会暦では「三位一体主日」となります。もちろんこの説教の中で三位一体についてお話しするいとまはありません。ただこの教えは聖書から導き出されて、わたしたちが正しく神さまを知る上で重要な教えであることは心に留めていただきたいと思います。この三位一体の信仰がないと、正しくイエスさまを知ることができません。

では、ナザレでお生れになられたまことの人であるイエスさまがまことの神さまであって、神さまから遣わされたお方であることとわたしたちがどう関わるのでしょうか。このイエスさまのルーツはわたしたちのルーツとも関係しています。よく「出自を知る権利」ということを言いますが、わたしたちが自分のルーツを知ることは、自分が誰であるか、どこから来て、どこへ行こうとしているのか、そのことを深く問うこととなります。これは単にその血筋、家系を

問うているではありません。もっと根源的なこと、人間はどこから来たのかという問いです。

聖書は、わたしたちの始まりを伝えています。人間は神さまによって造られました。神さまによって命の息を吹き入れられ、神さまの形に、神さまと通じ合うものとして造られました。そこにもっとも根源的な人間のルーツがあります。しかしこの神さまのもとをわたしたちは離れてしまいました。神さまとの約束を破って樂園を追放されてしまいます。けれども、神さまはわたしたちを追放されたままにしておかれません。何とかして神さまのもとに連れ戻そうとされます。それは、神さまのもとにわたしたちの本来の生きる場所があるからです。そこでこそ、わたしたちは自分自身を取り戻し、人間らしく生きることができるのです。

では、わたしたちを神さまのもとに連れ戻すために、神さまは何をしてくださったのでしょうか。独り子であられるイエスさまを与えてくださいました。イエスさまは、まことの人となられてわたしたちの存在をすべて担われ、わたしたちが生きるべき場所へ、神さまのもとへ引き上げてくださいます。それが受肉から昇天に至る一連のイエスさまの出来事なのです。イエスさまは天から来られ、まことの人として歩まれ、十字架で死んでくださいました。そして三日目によみがえられて、天に昇られました。それはイエスさまただお一人のことではありません。イエスさまは受肉され、わたしたちの存在をすべて担われて十字架で死なれ、よみがえられ、天に昇られます。そのようにしてわたしたちを神さまのもとへ、神さまの子どもとして迎え入れてくださるのです。聖霊がそのイエスさまの救いにわたしたちを導いてくださいます。

今日は、三位一体のことについて少しだけ触れましたが、父と子と聖霊がまさに総動員でわたしたちの救いに関わります。パウロは「すべてのものは神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」(ローマ11:36)と述べていますが、神さまに向かってすべてを導いてくださるのが三位一体の神さまの働きです。三位一体の神さまが、天地万物、人間をお造りになられ、そして罪からお救いになられ、やがて完成へと導かれます。ここには創造・救済・完成という流れ、方向性があります。このことを教会の言葉では「摂理」と言いますが、神さまはお造りになられたものを最後、完成まで諦めずに導いてくださるのです。

今日は詩編の第138編を読みました。「主はわたしのためにすべてを成し遂げてくださいます。主よ、あなたの慈しみがとこしえにありますように。御手の業をどうか放さないでください」(138:8)自分で自分の人生を仕上げることはできません。だからこそ神さまが「御手の業を放さない」でいてくださいます。神さまが初めから終わりまでわたしたちの人生をすべて成し遂げてくださるのです。わたしたちはただそのことを信じるだけでよいのです。

天の父よ。あなたがお造りになられ、お始めになられたこの世界、わたしたちです。そこにすべての始まりがあります。そしてお造りになられたすべてのものを完成へと導かれるためにあなたは尊い独り子イエスさまをくださいました。そのように神さまが御手の業を放さないでいてくださることを感謝いたします。その信仰によって信じて安んじて歩むことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。